

3 癌終末期患者の消化管閉塞に対するステント治療の検討

沢津橋孝拓・中塚 英樹・森岡 伸浩
清水 孝王・神田 達夫・宮下 薫

燕労災病院 外科

当科における癌終末期患者の消化管閉塞に対する消化管ステント留置術の治療成績を検討した。癌終末期の消化管閉塞症例に対して、2010年11月より2012年10月の期間に6例に消化管ステントを留置した。留置成功率は100%であった。全症例において消化管閉塞による症状は改善し、さらに経口摂取を再開することができた。偶発症・合併症は遅発性穿孔が1例認められた。留置後の平均生存期間は10日～184日(中央値71.5日)であった。Palliative performance status(終末期患者のPS, 以下PPS)は4例において改善し、palliative prognostic index(終末期患者の予後予測尺度, 以下PPI)においては、予後予測よりも生存期間が延長した。PPI > 6の予後不良群(予後予測3週以内)では治療効果に乏しく、生存期間延長にも寄与しなかった。

癌終末期における消化管閉塞の患者において、消化管ステント留置術は有用な治療法の選択肢の一つであり、PPSの改善と予後延長を期待できる可能性があるが、PPI高値の症例に対しては慎重な検討を有すると考えられる。

4 腹腔内洗浄細胞診陽性胃癌の予後

石川 卓・小杉 伸一・坂本 薫
市川 寛・羽入 隆晃・若井 俊文

新潟大学大学院 消化器・一般外科学分野

【目的】当科における腹腔内洗浄細胞診(CY)陽性胃癌患者の予後について検討する。

【対象・方法】1987年から2007年にCY陽性であった胃癌患者110名。臨床病理学的因子が予後に与える影響について検討した。

【結果】全110名の生存期間中央値(MST)は9か月であった。多変量解析で肉眼型4型(P =

0.045), R2手術(P = 0.035)が有意に予後不良で、2年生存率は6.0%, 7.9%であった。肉眼型が4型以外の場合、R1手術のMSTは17か月で、R2手術の8か月に比べ良好であった(P < 0.001)。一方4型胃癌ではR1手術のMSTは11か月であり、R2手術の7ヶ月より良いとはいえなかった(P = 0.141)。

【結語】CY陽性患者でも手術でR1を得ることができれば予後の改善が期待できるが、4型胃癌では切除の意義は少ないと思われた。

5 腹膜転移を有する胃癌に対する腹腔内化学療法(ip)の有用性の検討

藪崎 裕・梨本 篤・松木 淳
會澤 雅樹・丸山 聡・野村 達也
中川 悟・瀧井 康公・土屋 嘉昭

県立がんセンター新潟病院 外科

【目的】腹膜転移(P)に対するS-1併用DOC ipの治療成績を検討。

【対象と方法】2012年までの52例を対象。審査腹腔鏡か手術時にP組織を確認後ipカテーテル留置。S-1(80mg/m²day 1-14, q4w)とDOC(35-45 mg/m² ip day 1, 15 q4w)をPDか毒性中止まで継続。

【結果】

1. P3 25例, P2 4例, P0CY1 23例。男性 27例。年齢 59(21～80)歳。
2. Grade 3/4の有害事象は、好中球減少症(5.8%), TRDは認めなかった。
3. 化療によりCYの陰性化61%, Pの消失はなかった。
4. MSTは11.1か月であった。

【結語】S-1併用DOC ipは毒性が軽微で有用な治療法である。